

## 目次

- プロローグ
- 赤ちゃんはまだ？
- 妊娠リストラ
- 母親が仕事を辞めるのが一番
- 女の子で残念？
- 暴力は男のたくましさ？
- 母乳神話
- 贅沢な悩み
- 母親の愛情次第
- これって……虐待？

## プロローグ

……まるでたった一人で  
子どもの全責任を  
背負わされているみたい。

なんでも「母親は……」  
「母親でしょ」って。

その言葉を聞くと、  
どこかがヒリヒリする。

なのに夫は「いいじゃないか、  
一日子どもと家において。  
遊んでいるような  
もんだろ(笑)」って。

違う！違う！違う！  
だって、子どもって、  
ひとときも目が離せない。

24時間365日休みがない。  
どれだけ神経が疲れるか！

どんなにがんばっても  
小さなミスを責められ、  
うまくいっても  
「母親なんだから当たり前」。

すごく疲れる。  
神経張りっぱなしで、  
何かする度に子どもを止めて  
謝って、

謝って、

謝って……。

なんだか子どもが産まれてから、  
四六時中、謝ってばかりみたい。

## 赤ちゃんはまだ？

結婚って、  
こんなものなのだろうか？

こんなはずじゃなかったのにつて  
思いが胸をよぎる。

ケンジは夜 10 時過ぎにしか帰って  
来なくて、夕食も一人。  
せっかくの休日も「疲れた」って寝て  
ばかり。

それに、会う人、会う人が  
判で押したように  
「赤ちゃんはまだ？」って聞いてくる。

もう聞き飽きしちやった。

その度に「ええ、まだ……」と言葉を  
にごす私。

学生時代は、いい高校、いい大学つ  
てせかされていた。  
大学に入ったら、いい会社。  
就職したら、結婚。

やっとゴールかと思ったら、今度は  
赤ちゃん。どこまで走っても終わりが  
ないレースみたい。

こんなにいつも「赤ちゃんはまだ？」つ  
て聞かれ続けると、  
なんだかアセッてくる。

うちって、もしかして異常？  
だけど、まだ結婚して一年にもなら  
ないのに不妊外来へ行くのもどうか  
と思う。

けどもし、  
一年経ってできなかつたら？

病院行かないと、お義母さんたち許してくれないだろうなあ。

そういえば、友達も、  
妊娠するまで数年間、  
毎週日曜の朝8時にお姑さんから  
「赤ちゃんはまだ？」コールをされた  
とか言っていた。

胃が悪くなって入院したのも、  
わかるな～。

いっそのこと、  
できちゃった婚だったら、  
こんな思いせずにすんだのかしら？

ううん。それはそれで「ああ、あの人  
実は……」って、

一生妊娠で結婚できたみたいな言  
い方されちゃうんだろうな。

ケンジも、親戚や上司から「作り方知  
らないんじゃないのか～」なんて  
くさいオヤジギャグ言われてるみた  
いだし。

もう、いい加減にしてほしい！  
私たちが子ども作ろうが・作るまいが・  
まだできてなかろうが、  
あなたたちに何の関係があるッての！

……って言えたらなああ。

ランチタイム。先輩に、ぽろりとグチ  
を言ってしまった。  
そうしたら……。

ミドリ先輩の口からは、予想外の言葉が返ってきた。

「ミチかったら、案外きまじめなのね。

そんなのまともに相手してちゃ、神経すり減っちゃうわよ。  
決まった断り方作って、ともかく断っちゃうえばいいのよ」

「決まった断り方？」

「そうよ。たとえば職場だったら、『もしかしたら不妊症かも……』って暗げに言ったら、ふれちゃいけない話題だと思って、それから言わなくなるわよ」

ええっ!? 不妊症って「断る道具」に使っていいの？

ちょっと抵抗あるけど、確かに相手に悪いと思って、もう聞けなくなっちゃうな。

「じゃあ、お義母さんには？」

『私一人では子どもはできませんし、

あまり女から求めるのも逆効果ですから、お義母様からケンジさんへ言っていただけますでしょうか』ってふっちゃうのよ。

姑って息子にはあまり言わないのよね」

「へえ～、なるほどねえ」

ミドリさんは海外で働くことを目指す  
キャリアウーマンだ。  
仕事の合間や休日にビジネス英語  
のスクールにも通い、スキルアップ  
に余念がない。

もちろん実力は他の男性にひけを  
取らない……ううん、むしろ上かもし  
れないけれど、  
日本で女性が管理職になれるチャ  
ンスは少ない。だからこそ、海外で  
働こうとしているのだ。

そしてこの日本では、正論だけじゃ  
なく、男社会をうまくすり抜ける方法  
も必要。

根性論や精神論じゃなく、いつも合  
理的で実践的なアドバイスをくれる。

それにしても世間なんて、  
案外そんなもの？  
無責任な言葉は相手にしない、  
そんな交わり方もあるんだ。

本当はもう少し二人でゆっくりしたい  
と思っていた。  
だけど、そんなこともしも言ったら、  
「何考えてるの？」  
「夫婦でしょ！」「わがまま」  
なんて言われるに決まってる。

二人の人生設計なのに、私たち自  
身には選択権などないかのよう。  
なんだか気が重い。

だけど、そんなこと考えたのが悪かっ  
たのかしら？

生理が来ない。

2週間も生理が遅れてる。

わりと定期的に来る方だから、  
これって……妊娠？

なんだか複雑な気分。

肩の荷が降りたような安堵感と、  
もう少し二人だけの時間を楽しみた  
かったような落胆(ジレンマ)と。

ハッキリさせたくて、病院へ行く。  
結果は、やはり妊娠だった。

これでもう周囲からあれこれ言われ  
なくなるっていう安堵感が、  
スーッと胸の中をおりていく。

夜、ケンジに報告すると、  
「よかったじゃないか、ミチカ。  
俺もこれで一安心だよ」

屈託のない笑顔。  
よかった。

まだもう少し後でもよかった気もする  
けれど。よかったのよね。

その後に出てきた言葉に、  
ギクツとした。

「で、いつ会社辞めるんだ？」

え!? 辞める？

思わず絶句して、  
それからゆっくり聞いてみた。

「辞めなくちゃ、いけない？」

「何言ってんだよ。子どもってのは  
母親が育てるもんだろ。

三歳までは母の手でって、  
言うじゃないか。

大丈夫だよ。おまえが辞めても扶養  
手当がつくし、  
だいたいミチカの会社、育休だって  
ないだろ？」

大丈夫って、何が？

私が仕事辞めなきゃ  
産めないの？

突然、「母親」って……あなただって  
「父親」になるんでしょ？

どうして？

なんで妊娠した途端、私の人生だけ  
勝手に決められちゃうの？

ポーッとしながら、夕食を作った。  
頭の中がぐるぐるする。  
ケンジは、お義母さんや親戚に電話  
で報告している。

もちろん、私だってうれしい。  
だけど、  
「おめでとう」が、  
なぜだか少し気が重い。

うれしいけれど、初めての妊娠で、  
不安だっていっぱいある。

痛いのかな？  
病院は？  
貯金は大丈夫？  
これからどんな生活になるの？

手放して喜んでばかりはいられない。

なのにケンジには、  
そんな現実感がない。

それに今の仕事、契約社員からやっ  
と正社員になれたばかり。  
いま辞めたくはない。

だけど、実家の父までが、  
「早く仕事を辞めて  
丈夫な子を産むんだぞ」  
なんて言う。

自分の仕事なのに、

自分の人生の一部なのに、

周りに勝手に決められていく。

母親になる私には、  
選択権がないのだろうか？

## 妊娠リストラ

「あのう。お話しがあるのですが」

会社へ行き、課長に声をかけ、時間をとってもらった。

妊娠したことを伝えると。  
「おめでとう！！よかったじゃないか。  
これで安心だな。  
ダンナさんやご両親も喜んだだろう」  
「ええ」

「出産予定はいつ？  
次の人に余裕をもって引き継ぎできるようにしてくれよ」

ああ〜。言わなくちや。

「あの……、そのことなのですが」  
「なんだい？」

ひと息ついて、切り出した。

「続けたいと思っているんです、仕事。せっかく正社員にさせていただいたばかりですし。  
私も経理の資格をとりたいと勉強を進めていますし」

ハトが豆鉄砲をくらった顔って、  
こういう顔を言うんだらうか？

課長は一瞬ポカーンとして、  
それから苦々しげに言葉を続けた。

「何を言っているんだい？  
誰が赤ちゃんを育てるんだい。

君はこれから母親になるんだろう？」

明らかに不愉快そうな顔だ。

確かにそうだけれど……。

「仕事を続けたい」ということで、  
どうして  
「無責任な母親」というレッテルを貼  
られるんだろう？

子どもは私一人で作ったわけじゃな  
い。

夫は誰からも「仕事辞めろ」なんて  
言われないのに。

まるで私だけに、  
育てる責任があるみたい。

納得いかない思いが胸の中でモヤモヤする。

高校からの親友ヨーコに電話した。

ヨーコには9歳になる男の子がいて、小学校の先生を続けている。私の話を聞いくと、大きくため息をついた。

「ありがちな話よね。  
だいたいみんな無責任だわ。  
本人の意思を無視して、  
あれこれ言って。

それがどれだけ相手を傷つけるかってことぐらいわからないのかしら？  
それが常識と思って、  
自覚がない分タチが悪いわ」

「うんうん！ そうなの！ そうなの！」  
思わず力がこもる。

わけのわからない嫌な気持ち、  
どう言えばいいかわからないことを、  
ヨーコがやっと表現してくれた。  
もんもんとしていた気分が、少し軽くなる。

だけど、どうすればいい？

「そうね、とにかく仕事を続けちゃえば？  
それから、少しずつダンナを変えていくことね。まずそのあたりかな。」

「いい？子どもは一人で育てられるものじゃないわ。仕事も家事も育児もなんて、無茶なんかしないのよ」  
「うん」

「妊娠って、夫が、身近で強力な助っ人になるか、大っきなお荷物になるかの分かれ道よ(笑)。  
考えたら、いいチャンスじゃないの」

「だけどケンジったら、  
『子どもは母親が育てるものだ』って言うのよ」

「重症ね。よくあるタイプだわ。だけど、相手がそう言ったからって、ミチカまで同じに考える必要はないでしょ？」

「そうね」

「会社には、他に育休をとった人がいないか、総務に問い合わせ調べてみれば？」

「もしいなければ、同業種で、他に育休が整っている会社の資料を持って、上司に掛け合う。  
ダンナさんには……」

「ふむふむ。できるかどうかはわからないけれど、やってみるだけやってみよう。」

「やっぱりヨーコは頼もしい。」

## 母親が仕事を辞める のが一番

まずは総務担当者に聞いてみることにした。

うちみたいな小さな会社は、  
あまりきちんとした社員規定がない。

「あのう、経理部の者ですけど、  
これまでにうちの会社で育児休暇を  
取った方はいらっしゃるんでしょう  
か？」

ジロツと見られる視線が痛い。  
ちょっとした沈黙が  
長く長く感じられる。

担当者の男性は、  
あきらかに面倒くさそうな顔で  
応対してきた。

「育児休暇あ～？  
そんなの取った人、  
いないんじゃないの？」

「では、産休とか育休の規定は  
どのようになっているんでしょう？」

「え？ 妊娠したの？  
だったら、辞めればいいじゃない。

子どものためにも、お母さんが仕事  
を辞めるのが一番だよ」

あなたの説教なんか聞くために、  
ここに来たわけじゃないわ……  
って言葉をグッと飲み込んで、  
「はあ。一応知りたいので、  
教えていただけますか？」  
と伝えた。

「ふう。産休に育休ねえ。  
どれどれ、ええっと……  
これは出産祝い金の規定だし、  
ここも違うな。

う～～ん、特にこれといった規定は  
ないみたいだねえ。なにせ創業時か  
らあまり変更していないからね、うち  
みたいな中小企業は」

「そうですか」

「だいたいみんな辞めているんだよ」

「辞めている」んじゃなくて、  
「辞めさせている」のでは？  
って思いがチラッとかすめた。

このあいだの課長の反応からすると、  
そうだ。

だが、そうストレートに聞くわけにも  
いかないし。

「旦那さんは、どうしてるの？  
働いてるんでしょ？」

子どもができれば家族手当だってつ  
くし、  
税金も扶養控除されるし、  
そんなに奥さんが働かなくても、  
大丈夫だろう」

働かなくていいとか、悪いとか、  
どうして赤の他人のこの人に判断さ  
れなきゃいけないの？

不満気な顔を、  
不安と勘違いしたのか、  
担当者は無責任な言葉を続ける。

「大丈夫、心配いらないよ。  
なんとかなるもんだから」

だから、そういう問題じゃなくって！  
私が聞きたいのは会社の規定であっ  
て、あなたの意見やおせっかいじゃ  
あないのよ。

しかし、会話は平行線のままかみ合  
わない。

担当者は、  
「ともかく旦那さんに相談しなさい。

出産一時金や手当もあるから」

にこにこした笑顔に、「はあ」と気の  
抜けた返事をするしかなかった。

仕方がない。ともかく出産ギリギリまで働こう。その間に、できる限りの手を探すしかない。

ケンジは  
「妊娠したんだからすぐにでも辞めた方がいい」とうるさい。

「通勤ラッシュも危ないし、何かあったら、どうするんだよ。おなかの子の母親なんだぞ」

心配してくれるのはうれしいけれど、ベビー用品を私が電車や車で買いに行くことには、危険だなんて言わないし、送ってもくれない。

それで、  
どうして会社だけが危険なの？

むしろ無臭のオフィスは、ツワリも刺激しないし過ごしやすいかも。  
適度の運動も必要だと言われたし。

会社だけを敵対視する意味がわからない。

会社の出方も見えないし、  
とりあえずここは時間稼ぎが必要。

「ねえ、あと3ヶ月でボーナスだし、  
せつかくならボーナスもらってからの  
方がいいと思うの」と、矛先をかわし  
た。

ケンジはとたんに  
「そうだな」と同意。  
なんて現金なんだろう。

そして3ヶ月後、  
ボーナスをもらうと、  
「そろそろ辞めるんだろ？」  
ってケンジの催促。

「ベビー用品もいろいろ必要だし、  
結構お金かかるみたいよ。  
だからもう少し、その分稼いでおくね」

のらりくらりとはぐらかし、  
徐々に引き延ばすことに私は成功し  
た。

一方、私はインターネットで情報を集めて、厚労省に相談へ行き、会社と交渉を続けた。

だが「前例がない」の一点張り。

一人認めれば、  
次の女性社員が妊娠したときも  
認めなくてはならなくなる。  
そんな余裕はない、  
というのが会社の都合なのだろう。

とはいえ、  
妊娠を理由とした解雇は違法になる。

そこで会社は、  
配属転換という形で、片道2時間か  
かる営業所への異動を通達してきた。

実態は明らかに、妊娠リストラ。

だけど、  
配属換え→本人の自主退社にすれば、  
問題ないわけだ。巧妙なやり口。

しょせん、女性は腰掛けとしか捉えていないのだろう。

契約社員から8年間も勤めてきて、  
新人の指導もしたし、現場のことなら  
一番くわしいつもりだった。  
古い顧客の情報も、  
私ならどこにあるか、すぐにわかる。

新人の営業員よりも、  
私の方がずっと貢献していると思う。

だけど……。

若い男性社員は、  
アツという間に責任ある仕事をまかさ  
れ、私のお給料を飛び越していく。

仕方ないわ。  
会社に交渉して、辞めることを条件  
に配属替えを撤回してもらい、  
出産前まで、今のままの部署で仕事  
を続けさせてもらうようにした。

会社にとっても、ベテラン社員が急  
にいなくなると困るのだ。  
私はギリギリまで働くことにした。

そんな私を、後輩のユミコは不思議  
そうに見ていた。

「ミチカ先輩、ムリして仕事来なくても、

早く辞めちゃえばラクなのにい〜」

「あら。私こう見えても、  
結構、仕事好きなのよ」

「ええ〜っ!! 本当ですか？

だって毎日大きなおなかで  
満員電車で揺られるなんて、  
しんどいじゃないですか。

うちにいた方が  
ゼツタイラクだと  
思うけどなあ。

なんでそこまでして働くのか、  
わかんない」

そういえばユミコは  
バリバリの結婚退職志向。

公認腰かけ就職だけあって、  
仕事の間違いも多いこと多いこと。

なにせ「私、わかりませ〜ん」が  
くちぐぜなのだから(笑)。

私たちにとっては  
やっかいのタネだが、  
課長や人事担当者には受けがいい。

「女の子はユミコちゃんみたいに、  
女の子らしいのが一番だね」

なんで仕事を間違えるのが  
「女の子らしい」のよっ!!

あ〜、もう、聞き捨てならない。

それに、  
間違いをフォローする周りの迷惑も  
考えてほしいもんだわ。

ああ、だめだめ。  
イライラすると、  
おなかの赤ちゃんに良くないな。

私は、予定日まであと3週間に迫っ  
たところまで働き続けて、  
職場を後にした。

## 女の子で残念？

育児がこんなにたいへんだなんて、  
どうして誰も教えてくれなかったんだ  
ろう？

事前に聞いていたのは、出産がどん  
なにたいへんかという話ばかり。

「鼻の穴からスイカを出すみたい」だ  
とか、そんな話を聞くたびに、  
まだ見ぬ世界の神秘と恐怖を感じた。

だけど、出産は半日か、長くても2日  
で終わる。

その後が続く長い長い育児の日々  
が、こんなに思ってもみないことに満  
ちているなんて、  
そのころは、想像もつかなかったわ。

あの日。

予定日を3日ほどすぎた日、

いきなりそれは始まった。

これが……陣痛？  
それとも、  
ただのおなかの張り？

うっ、くう〜〜ッ。

身体の芯がジーンと  
しびれるみたい。

ああ、もうダメだ。ガマンできない。

そう思ったころ、  
痛みはスーッと波を引き、  
ウソのように収まった。

時計を見る。9時15分。  
なに？ いまの感じ？

それから15分ほどして、  
またあの痛みとしびれがやってきた。

痛みが来ると、身体中が引きつった  
ように、ジーンとする。  
ゾーンと身体全体が突っ張るよう。

しばらくがまんしていると、  
また痛みがフッと和らいだ。  
時間は、ほぼ15分間隔。

3〜4回繰り返して、確信した。  
きっとこれが陣痛だわ！

連絡しなくちゃ……。  
痛みと痛みの間の平静な時間に、  
まずケンジに電話した。

「わかった。病院へ行くよ」

実家にも報告したところで、  
次の波が……。ううああ。

予定日近くから準備してあった荷物を抱え、タクシーで病院へ。

うちは都内だから、病院だって、いくつもある。

だけど最近、どんどん病院が統廃合されて、「近くに産院がない」って話をテレビで見た。

産院まで間に合わなくて、赤ちゃんやお母さんが亡くなるケースも急増しているようだ。

産院をなくして、どうやって産めっていうんだろ？

少子化、少子化、「女が子どもを産まなくなった」って、しきりに言うけれど、

「産まない」じゃなくて、「産めない」んじゃないの？

タクシーに乗ってそんなことを思う間も、痛みとしびれは規則正しく襲ってくる。

病院に着く。  
ドギドキするなあ。

自分の赤ちゃんと対面できるワクワク感。そして、ちょっぴり怖さも。

あ～～、いよいよ私、産むんだあ!!

陣痛室に案内される。  
ここで陣痛が5分間隔くらいになって、  
子宮口が開いてきたら、分娩室に移  
動するとのこと。

ところが、あんなに規則的に来てい  
た陣痛が、  
いざ病院に着いてからは、  
妙に不規則になってきた。

おかしいなあ。  
もう産まれるって思ったのに。

といっても  
陣痛がなくなるわけじゃない。  
間隔が長くなって、  
不規則にしびれがやってくる。

一向に陣痛の間隔が  
縮まってくれないのだ。

繰り返し繰り返し痛みに耐えているう  
ち、いい加減体力を消耗してきた。  
どんどんパワーがなくなっていく感じ。

こんなんじゃ産めるのかしら？

病院に駆けつけてくれたケンジも、  
退屈そうだ。  
最初こそ臨場感があったものの、  
いつまで経っても陣痛の間隔が縮ま  
らないので、先が見えない。

「なんだ。まだかよ。  
オレ、仕事置いてきたんだぜ。  
いったん戻って来ようかなあ」

……って、  
おいおい、あなた父親じゃないんで  
すかあ!?(-"-;)

「こんなことなら、急いで来るんじゃないかなあ」

「はあ?! なんだって?!」  
最初からキレ気味に返してしまった。

だってこっちは痛みに苦しんで  
いっぱいいっぱいなのだ。

だいたい、あんたの仕事と、  
子どもの出産と、どっちが大事かも  
わかんないの?  
子どもなんて、一生に1人とか2人し  
か産まないんだよ。  
だったら生涯に1回か2回しかない  
チャンスってことじゃん!

そんなこともわかんないなんて、  
バカかよ、おまえは……って  
怒りがこみ上がって来たところで、  
また波が襲ってきた。

ああああ、ダメだ。  
ケンカするどころじゃない。  
う~~~~ツ。

こんなことを繰り返して、  
1日半が過ぎたころ、  
へトへトになった私から、  
赤ん坊は出て来た。

分娩室では、何がなんだかわからな  
い初体験の連続だったし、  
切ったり、縫ったり、  
痛みのオンパレードだった。

けれど、ともかく無事産まれてきてく  
れたのだ。

神さま、ありがとう!  
ありがとう! ありがとう!

感動というには、  
なんだか虚ろな感じ。  
赤ん坊は新生児室にいて、  
顔ものぞけないのだから。

産まれたとき、  
一瞬抱かせてもらえたけれど、  
よく見えなかった。

ああ、早く会いたいなあ。  
気持ちが募って、  
意識が冴えわたる。

そして、いよいよ初授乳の時間。  
初めて自分の赤ちゃんを  
この手で抱ける！

待ち遠しくって、指定された時間の  
10分近くも早く新生児室に入ってしまった。

入ってすぐ、  
アア～～！アア～～！と、  
ひときわ大きな声で大泣きしている  
赤ん坊がいるなどと思ったら、  
それが私の赤ちゃんだった。

ズラリと並ぶ新生児ケースに名札が  
あり、腕に、私の名前のネームタグを  
つけている。

どうしよう。

どうすればいい？

おろおろして、  
看護師さんに声をかけた。  
抱き方を教えてもらい、  
授乳にチャレンジする。

だけど……。

赤ちゃんは、胸にパイと顔をそむけ、  
吸ってくれない。

私、へたなの？

どうやらおっぱいが出ていないから  
みたい。

赤ちゃんが産まれたら、自然にお乳  
が出るものだと思っていたのに……。

あきらめて部屋へ戻り、  
次の授乳タイムを待つ。

だけど次のチャレンジも、  
やっぱり、ダメ。はあああ。

体重が減少しているということで、  
砂糖水を哺乳瓶に入れて与えること  
になった。

自分のお乳ではなく、  
砂糖水かあ……胸の奥がチクンとす  
る。

赤ちゃんはおなかがすいていたらしく、驚くほどの勢いで、グイグイ吸い込む。

10秒くらいで、一気飲み！

空になった哺乳瓶を口から離すと、吸口のゴムが真空のようになって、ジューツ、ポン！と派手な音を立てた。

新生児室に響き渡った異様な音に、その場にいたお母さんたちが一斉にパーッと振り向いた。

なんて力強くて  
元気な赤ちゃんなのだろう。

弱々しく、ミルクもうまく吸えないような赤ちゃんも多い中、その強さは明らかに際立っていた。

自分のお乳を吸ってくれないのは寂しいけれど、仕方ないな。

授乳タイムを終えて部屋に戻ると、お姑さんがお見舞いに来ていた。

「ミチカさん、おめでとう！  
女の子だってね。  
男の子じゃないのは、  
残念だけど、次があるじゃない」

え？女の子で、残念？  
「次が」って……？

女の子を産んだのは、  
子どもとして、カウントされないの？

やっとのことで産んだのに、  
「残念」だなんて。  
この無神経さが理解できない。  
ああ、もう出てってほしい。

けれど、仮にも姑。  
わざわざ出産見舞いに来てくれたと  
ころを、むげに扱うわけにもいかない  
し。

ケンジが  
「まる一日半も待たされたんだぜ」  
と言う。

「まあ、ずうっと待ってたの？  
最近の妊婦さんは幸せ者ねえ。  
私たちのころは、  
男は仕事が第一。  
女は一人で産んだものよ」

ああ、まただ。

姑の言葉は止まらない。  
「だいたい、男が出産の場にも、  
役に立たないじゃない。  
その分、仕事をした方が、  
家族のためになるってんだわ」

「まあ、でも、約束してたからさ、  
立ち会うって」  
ケンジはいかにもやさしい夫だろと  
いわんばかりに鼻にかける。

う〜ん、うれしかったけど、  
そんなにいばるほどのこと？

それに、ケンジ、  
途中で「会社戻ろうかな」  
なんて言ってなかった？

さらに姑は続けた。  
「女の子だから、  
育てるのもラクでしょう？  
大人しくて手がかからないものねえ」

女の子だから、大人しい？

さっきの新生児室での状況が  
頭に浮かんできた。

一番目立つ大きな泣き声。  
他のお母さんたちがビックリするほど  
の力強いお乳の吸引力。

大人しいなんて、  
冗談じゃない！

だけど、初めての出産だし、  
比較ができなくて、  
なんともいえないんだけど。  
このモヤモヤした不快感。

男だから、女だからって、  
赤ちゃんのときから、  
そんなに別扱いする必要あるの？

## 暴力は 男のたくましさ？

名前はミクと名づけた。

正直、私は男でも女でも  
どっちでも良かった。

ましてや赤ん坊に違いがあるなんて、  
想像もつかなかつたし、  
無事に産まれてきてくれたことが  
素直にうれしい。

だけど、おかしい違和感は、  
退院してからも、  
ずっとつきまとつた。

赤ん坊を抱いて外を歩くと、  
必ずこんな風に声をかけられた。

「まあ、元気な男の子ね」とか  
「男の子は、それくらいよく泣いて、  
元気でいいのよ」とか。

ミクは95%、男の子に間違えられる。

角刈りっぽいルックスもその一端で  
はあるけれど、  
どうやら誤解される大きな要因は、  
その泣き声の力強さにあつたようだ。

だけど、それにしても……。

「いえ、女の子なんです」と答えたとき、  
相手に漂う妙な反応が気にかかる。

「あら、ごめんなさい。  
女の子だったのね」ですむところを、

「女の子でも、元気なのねえ」とか、  
「女の子にしては、大きな声ねえ」と  
か。

「でも」とか、「にしては」って、  
何それ？！

女の子が元気じゃ、  
何か都合悪いの？

女の赤ちゃんが男の赤ちゃんより、  
泣き声デカくて、  
パワフルだと、  
おかしいとでも？

まるで女の子なのにナマイキといっ  
た気配さえ伝わる。  
そんな反応って、おかしくない？

あ～、なんなのよー！  
まったく！！

いいじゃない。  
女の子が強かったって。

男の子＝「強さ」、  
女の子＝「弱々しさ」を、  
ムリヤリ見つけようとする社会なんて  
うんざりする。

こんな赤ん坊にまで  
「女の子だから……」  
「男の子は……」って、

どうかしてる!!

親友のヨーコに、  
思いの丈を吐き出した。

「どうしてなの？ どうなってるの？  
なんで男だの女だのって  
いちいち取り沙汰するの？  
まだこんな赤ちゃんだっただのに！」

ヨーコは何度もうなずきながら、自分  
の仕事で遭遇する実例を話してくれ  
た。

「うちの小学校でも、  
男の子のお母さんの中には  
時々おかしい人がいるのよ。

『男の子だから、片付けができなくて  
も仕方ない』とかね」

「ええ～!! 片付けに男とか女とか関  
係ないでしょう！」

第一、仕事ができる男の人って、  
整理や段取りもうまいじゃない」

「そうなのよ。結局お母さんが何もかも  
先回りしてやるのが良くないんだ  
けど、それを『男だから』って免罪符  
にすり替えちゃうの。

息子の母親って、娘の母親と違って、  
不必要に何もかもやりすぎるわ」

「そういえばお姑さんも、  
結婚前までケンジの下着を買って送っ  
てきていた。

いい年した男が、小学生みたいに  
母親に世話をみてもらうなんて、  
気持ち悪くって！」

「だけど、それが珍しくない世の中みたいね。

低学年を担当しているから、ケンカした時に、まだ手が出ちゃうこともあるんだけど、男の子の母親って、自分の子どもが暴力をふるっても、『息子には、“女の子にはやさしく”って言ってありますから』って、平気な顔してる。

「ええーっ！！  
暴力とやさしさって、  
全然別の話じゃない！  
頭おかしいんじゃないの」

「もちろん一部の母親だけだね。  
もっとヒドイのは、他の子どもを殴ったりケガをさせたりしても、謝りもしないで、『男の子だから当たり前』って開き直る親。

しかもケガをさせた女の子の家庭へ『おたくは男の子を産んでいないから、わからないでしょ～』なんて失礼な嫌味まで言ってるのよ」

「えええええ！最っ低！！  
そんなヒドイ親がいるの？  
第一なんで、『男だったら暴力ふるって当たり前』なのよ！  
そういう親が、DV男を育てるのよ。

給食費を払わない親とかモンスターペアレントって話題になっているけれど、こっちの方が狂ってるわ！  
人間として、病んでる」

「そうなのよ！ ただの乱暴を、  
男の強さとすり替えてるのね。

だけど、もうそういう親って、頭がおかしいから、何を言っても、  
まったく違う話にねじ曲げちゃう。

しょっちゅう周囲のお子さんにケガをさせているんだけど、  
あれこれ後から理由をこじつけて正当化したり、ごまかしたり。

自分が加害しているのに、いつも不幸を装って泣き落としするし。

頭の中が妄想に支配されていて、  
次々ウソを作るから、たちが悪い。

その上、ある政党の幹部に取り入って、  
事件を起こす度に、地域の有力者に、  
もみ消しを手伝わせているのよ！

まったく悪どい！  
手に負えなくて、まいってるわ」

「それは手強いわね」

「でも、だからって放っておくわけにはいかなくてね。

前の保育園がその家庭を放置した  
ものだから、  
どんどん親も子どももエスカレートして、ひどいいじめ事件を起こしたらしいわ。

やっぱり見逃したり、  
放置してはダメね。

悪くなることはあっても、  
良くなることはないわ」

「これからどうするの？」

「うん。いじめ相談機関もネットでいくつか見つけたし、  
いじめの研修会に参加して、  
具体的な打開策を探るつもりよ。

1年生でクラスが荒れたら、6年間、  
同級生は目も当てられない状態になるもの」

ヨーコからは、  
並々ならぬ決意が伝わってきた。

## 母乳神話

ようやく3ヶ月検診の日が来た。  
子どもが産まれてから、  
1日がすごく長い。  
24時間、ずっと赤ん坊に振り回され  
ているかんじ。

娘は鳴き方がたくましいだけでなく、  
体も一回り大きかった。  
その外見はまるでお相撲さんみたい  
(笑)。

検診の先生は、  
一目見るなり言った。

「あら、大きい赤ちゃんね。  
お母さん、母乳出ないの？」

ギクッ！  
なんでわかるの？

「ミルクの赤ちゃんって  
大きいから、すぐわかるのよ」

そう言われて周りを見わたすと、  
確かに、小柄でギュッと詰まった感じ  
の赤ちゃんは、母乳。

ちょっとふやけたように大きめな赤ちゃんは、みんな哺乳瓶でミルクだ。

娘の外観が、  
私がお乳が出ないせいだと思うと、  
じんわりと罪悪感のようなものが広がる。

私にもお乳が出ていれば、  
違っていたのかな。

医師の  
「お母さん、母乳出ないの？」  
って言葉が、重たく後を引く。

母乳も出ないなんて、

私は母親失格？

なんだか自分が欠陥品のように  
思えてくる。

産院では、母乳マッサージもあったけれど、その痛みといたら！

目から火花が出るんじゃないかと思うほど、頭の中が一瞬真っ白になった。  
あんな激痛、もう二度とごめんだわ。

でも、そう思うこと自体、母親失格？

母親だったら、痛くても、  
子どものために耐えるんだらうか？

昔はミルクもなかつただらうし。  
どうしていたんだらう？  
いつまで経っても堂々めぐり。

ピンポン♪

あ、そうだ。  
ミドリさんが出産祝いに来てくれる約束だった。

ミドリさんは、にこにこして開口一番。  
「まあ～！ 元気な赤ちゃんねえ。  
無事に産まれて良かったじゃない」

「ええ」

「どう？ 一日中、  
ウンチにオツパイにで、  
眠れなくてたいへんでしょ？」

聞かれたくなかった言葉。  
「……うん。でもうち、  
おっぱいじゃなくて、ミルクなの」

「あら、そう」

拍子抜けした。  
それから抑えていた気持ちが  
あふれ出た。

「母乳とミルクじゃ、外見も違って、  
一目見てわかるって。  
私のオッパイが出ていたら、  
こんな男の子みたいな外見にならな  
かったのかな、とか気になって」

「あはははは。  
そんなこと考えたって、  
仕方ないじゃない。  
だって、出ないんでしょ？  
くよくよ考えたら、出るようになるの？

ならないんなら、考えるだけムダムダ。  
もったいないわ。

ミルクだろうと、  
この子とっても元気じゃないの。  
何が不足なの？」

そうだ。不足も不満も、私にはない。  
ただ、母親としてこれでいいんだろう  
かって、不安だった。

「なんだかおっぱいが出ないって、  
母親失格みたいな気がして……」

「健康なんだし、  
母乳じゃなくてもいいじゃない」

ミドリさんの言葉を聞いて、  
こだわっていた気持ちが  
ほぐされていく。

ヒタヒタと忍び寄る罪悪感のようなも  
のが、気持ちの底から  
ずうっと離れなかったから。

だけど、すべてが完璧な母親なんて、  
いないよね。

自分はダメな母親かもって思うほど、  
子育てが苦しくなっちゃう。

うん。元気なら、それでいい！  
そうなんだわ。

無事に産まれて来てくれた時の、  
あのこみ上げるような喜びが  
よみがえって来た。

## 贅沢な悩み

「いいじゃないですか。  
ミチカ先輩は結婚して、子どももでき  
て。幸せですよ。  
いったい何が不満なんですか？」

翌週、出産祝いに来てくれた後輩の  
ユミコは独身。

シロガネーゼや二子玉マダムといっ  
たリッチな専業主婦に憧れるだけあつ  
て、なかなか条件にかなう男性が  
つかまらないのだろう。  
この分では、寿退社は当分先のよう  
だ。

間違いばかりで「わかりませ〜ん」が  
くちぐせで、お荷物だと思っていた  
ユミコ。

だけど、仕事を続けているからだろう  
か、久しぶりに会うと、  
自分とは全く別世界にいるように見  
える。

なんだか少しまぶしい。

「毎日、赤ちゃんの世話で  
クタクタで眠くて」

「何もかも揃っていて、  
そんなことを言うなんて、  
贅沢な悩みですよ」

贅沢な悩み？  
少しは弱音くらい吐かせてよ。

それに……羨ましいのは、私の方だ。

私だって、少し前までは  
同じようにオフィスへ通い、おしゃれ  
やショッピングを楽しんでいた。

だけど、今は、オムツを替え、食事を  
食べさせ、会話が成り立たない子ども  
も相手に一日を過ごす。

会社のコピー取りにもうんざりしたけ  
れど、今よりはマシだよ。

それもたった一人で全責任  
背負わされてるみたい。

なんでもすぐ「母親は……」  
「母親でしょ」って。

その言葉を聞くと、  
どこかがヒリヒリする。

なのにケンジは  
「いいじゃないか、おまえは。  
一日子どもと家において。  
遊んでいるようなもんだろ(笑)」って。

違う！ 違う！ 違う！

だって、子どもって、  
ひとときも目が離せない。

24時間365日休みがない。  
どれだけ神経が疲れるか！

ユミコが帰って一人になったら、  
涙がポタポタ落ちてきた。

誰もわかってくれない。

何もわかってないくせに、  
「幸せ」って決めつける。

もういやだ。子どもなんて、  
いなくなればいい!!  
いらない!!

私を解放してよ!!

翌日。  
昨日と変わらない朝。

何も変わらないことが、  
体と心をまた重くする。

## 母親の愛情次第

毎日がめまぐるしく過ぎていく。

離乳食が始まったと思ったら、  
はいはい。  
自分で移動するようになると、  
これまで以上に目が離せなくなった。

それに、ちょっとでも私が離れると、  
あらん限りの大声で泣き叫ぶ。  
いわゆる後追いの時期。

一日中抱き続けてはいるけれど、  
キッチンには包丁や火もあって危ないので、  
ベビーガードを使った。  
すると、ガードの網に全身を押し付けて、  
ギャアギャアと叫びまくる。

顔にはお中元のハムのように、  
ガードの編み目がついている。

そういえば、  
そろそろ1歳検診だわ。

3ヶ月検診のときは傷ついたけれど、

6ヶ月検診のときは問題なかったし、  
大丈夫。

だけど、会場に行ってみたら、  
不安でドキドキしてきた。

どの子もミクよりしっかりして見える。  
それに数歩でも歩ける子までいる！

順番が来ると、先生はつっけんどんに聞いてきた。

「そろそろ歩いていますか？」

「いえ、まだ」

「つかまり立ちは？」

「特に」

「えっ？ つかまり立ちもしてないの？  
それはちょっと遅いねえ」

グサッ。

私だって立って歩いてくれるのが待ち遠しい。  
だけど、せかすわけにもいかないし。

「歩行器とかは、使っている？」

「いえ、特に」

「お母さん、赤ちゃんの足の体操はしてあげてる？」

「ええ、時々でしたら」

「時々ですか。」

お母さんが愛情をもって赤ちゃんに接してあげているかどうかで、成長って変わってくるんですよ。

言葉の数だって、語りかけの多いお母さんは、お子さんの発語が多いしね。

母親としての自覚をもって、もっと赤ちゃんに目を向けていってはどうでしょう」

愛情……自覚……もっと……。

この子が歩かないのは、  
母として私の力や愛情が  
足りなかった、ってことなの？

おっばいのように  
体質なら仕方ないけれど、  
赤ちゃん体操なら、誰でもできる。  
それを時々しかやらなかった  
私の責任？

子どもの成長も、  
私の母親として努力次第って  
言われているみたい。

「遅れているのかも」って不安に、  
「母親として努力が足りない」って不安が、  
増えた感じ。

初めての子育てで、いつもいつも、  
これでいいんだらうかって迷う。  
その上、「母親として」って、  
追いつめられる。

そんなに毎日、足の体操に、語りかけ  
によって、赤ちゃんにかかりつきり  
になれるだろうか？

今だって毎日へとへとになるくらい  
世話を振り回されてる。  
これでもまだ足りないの？

こんなことなら、  
検診なんか来なければ良かった。

母親として評価されるのは、  
もうたくさん！

## これって……虐待？

児童施設で遊んだ帰り、バスに乗った。

今日は同年代ともうまく遊べたな。  
帰ったら、夕ご飯は何にしよう。

そんなことをぼんやりと考えていたら、

突然の声。

「ちょっと、あなた！」  
……え？私？

「聞いているの？  
子どもがボタン押したのよ！」

突然のことで把握できなかったけれど、どうやら降車ボタンが点灯しているのに、誰も降りる人がいなかったようだ。

だけど、ミクがいたずらを？  
今までそんなことをしたことはない。  
ミクは向こうを向いたまま。

なにかの間違いかもしれないと、  
聞き直してみた。  
「あの……、この子が降車ボタンを  
押したのでしょうか？」

「あ～ら、開き直ってるよ！  
いやだねえ、近頃の母親は。  
子が子なら、親も親だよ。まったく！」

バス中に響き渡る大きな罵声。

いったい何が起こったのか、わからなかった。

何のことかもわからないまま、  
どうして人前でこんなに罵倒されるの？  
悪いならこちらが謝るけれど、  
ただ確認しただけなのに、  
あんなに大声で非難されるなんて…  
…。  
子どもことは  
すべて私の責任にされる。

ふいに向けられた悪意は、  
背中から突然ナイフで刺されたよう  
だった。

バスを降りてからも、  
ベツタリと嫌な感情がからみついた  
まま。

「開き直ってるよ」

「いやだねえ、近頃の母親は」

「親も親だよ」  
……投げつけられた言葉が、  
ぐるぐると頭の中をリフレインする。

ふとした一瞬の間の出来事。  
まったく気がつかなかった。

「母親なのに」気がつかなかった、  
私が悪いの？

だけど、だけど。  
1秒も子どもから目を離さないでいる  
なんて、  
そんなことできない！

お店で、お金を払うのに財布を開  
く間にも、サッとどこかへ消えて姿が  
見えなくなる。

一日中、子どもの動きから目を離さ  
ないようにしているけれど、  
どうしても目が離れる瞬間はある。

それすらも許されないの？

すごく疲れる。

何かする度に子どもを止めて、

謝って、

謝って、

謝って……。

なんだか子どもが産まれてから、  
ずっと謝ってばかりいるみたい。

どうしてなんだろう？

夜。夫は今日も帰りが遅い。  
いつもの、ミクと二人だけの食卓。  
相変わらず、テレビばかり観て、  
ぼろぼろと食べ物をこぼす。

ああ、掃除しなくちゃ……。  
なんでちゃんと食べてくれないのだ  
ろう。

育児雑誌を読んで、有機野菜を使っ  
てみたり、料理に工夫してみても、  
見向きもしない。

この子には私が手をかけて作った食  
事よりも、テレビアニメの方が大切な  
のだ。

イライラする。  
昼間の言葉が、  
どこかにひっかかっている。

気がつかないところで、  
子どもが何かする度に、  
私が責められる。  
こんなに一生懸命やっているのに。

ガチャン！

テレビを観ながら食べていた娘は、  
ヒジをあてて食器をひっくり返した。

せっかく作った料理がテーブルの下  
にこぼれる。  
私の努力を、この子は無視する。

「なにやってるのッ！  
今はご飯の時間でしょ。  
いつまでダラダラ食べているのよ！」

つい声が荒立った。  
なのに、娘はまだアニメに夢中だ。

カチーンときた。

「聞いているのッ！」バシッ！！

気がつくと、  
二度、三度と叩いていた。

それでも気持ちが高ぶって、  
ブレーキがきかない。

「食べ物を粗末にしてはダメッ！  
テレビばかり観てるからでしょ。  
バカ！」と怒鳴る私。

いったんついた怒りの勢いが  
止まらない。

娘を殴った手の痛みが、  
不思議な感触として残る。

もっと殴ってしまいたい衝動。  
自分自身の貯まった怒りが、  
その瞬間だけ、  
スーッと引くような気がするのだ。

これって……、虐待？

泣きじゃくる娘の姿を前に、  
ふと我に返った。

最低だ。  
大義名分で怒りを正当化している自  
分に気づく。  
原因をあげつらってののしり、  
殴ってしまったのだ。

いつものようにテレビを観ながら食  
事してただけ。  
食器を倒したり、食べ物をこぼした  
のだって、初めてのことじゃない。

だけど……、それがどうしても今日  
は許せなかった。

なぜこんなに怒りがこみ上げたのだ  
ろう？

ふとよみがえる言葉。  
「いやだねえ、近頃の母親は。  
子が子なら、親も親だよ。まったく！」

バスの中のたくさんの人の、  
冷たい視線。

また、私が責められる。  
この子の一挙一動が、  
母親である私の責任。  
この子が何かするたびに、「私の  
しつけができていないから」って。

まるで四六時中監視されているみた  
い。  
そう思うと、不安で  
過剰に反応してしまう。

ただ食器をひっくり返したただけなのに、  
見えない影におびえる自分がいた。

私だって、  
やさしいお母さんでいたいのに……。

育児雑誌を読んで、そんな姿に憧れた。どう接すればいいか、探して  
試してみた。  
こんなにがんばってるのに。

もう、何もかもが嫌だ!!!

こんなとき、相談したくても、  
ケンジは今日も帰りが遅い。

それに帰るまで待たなくても、  
返事はわかってる。

「疲れているんだよ」  
「おまえに任せてるだろ」

いつものことだ。  
ため息が出る。

。。。。+。。。。+。。。。+。。。。+。。。。+

ページ数が多いため、  
3巻のファイルに分かれています。

**続きは、こちらより  
ダウンロードできます。(無料)**

↓ ↓

<http://don.jp/ezform110/8871/form.cgi>

1巻のご感想、あなたのマザハラ  
体験を、ぜひお聞かせください。

。。。。+。。。。+。。。。+。。。。+。。。。+